

眉をあくれば

秋田県立雄物川高等学校
校長室だより 第8号
平成30年1月15日(月)
執筆 信田 正之

春高バレー観戦記

皆さん、新年明けましておめでとうございます。いよいよ2018年がスタートしました。今年の干支は「戌(いぬ)」ですが、この字には「草木が枯れる状態」や「収穫する」という意味があるのだそうです。今年は、皆さんの目標や夢が結実し、成果を「収穫できる」年になりますよう、心からお祈りいたします。

さて、本校にとっての年始めと言え、何と言っても春高バレー全国大会でしょう。24年(正式には23年)連続して出場していますので、もはや文化祭や運動会のような年中行事になっています。今年も1月4日から戦いの火ぶたが切られ、本校の初戦は5日の2回戦から。もちろん私も東京まで応援に行ってきました。

春高バレーが行われる東京体育館は、JR千駄ヶ谷駅のすぐ隣にあります。駅を降りると、まず目に飛び込んできたのは、巨大な体育館の屋根と、その前に群がる人、人、人……。さらに、体育館内に入ると、広大な4面コートで躍動する選手たち、遙か高い天井、無数の照明、何台ものTVカメラ、3階まである観客席、そしてそれを埋め尽くす応援団と湧き上がる声援……。やはり高校バレー最大のイベントです。私自身、生で見るのは初めてでしたので、その熱気と迫力にいきなり圧倒されました。

本校の対戦校は三重県代表の松阪工業高校。試合開始時間が予定よりも1時間以上遅れましたが、本校の選手はそれに惑わされることなく普段どおりの力を発揮し、第1セットを比較的簡単に奪取することができました。ところが、第2セットは本校の出足の鈍さに乗じて相手がポイントを稼ぎ、終盤までもつれはしたものの、逆にセットを奪われてしまいました。一進一退の攻防のまま、いよいよ運命の第3セットへ。第2セットとは違って本校の出足が順調だったため、始めは「このまま押し切れる」という期待が膨らみましたが、やがて粘る相手に追いつかれ、勢いを止められないまま試合終了。上位進出を目標にしていた選手たちにとっては、悔いの残る結果となってしまいました。

「秋田県では勝って当たり前」と思われている本校男子バレーボール部ですが、勝つことはそんなに生やさしいものではありません。遠く親元を離れ、寄宿舎生活を送っている選手もいます。土日は毎週のように遠征。休日はほとんどありません。それでも、夢の実現のために厳しい練習に耐え、汗と涙を流してきた結果が今ここにあるのです。ですから、勝っても負けても私はこのような部員たちを心から誇りに思います。そして同時に、「だからこそ夢を叶えさせてあげたい」とも強く願うのです。

試合が終わったあとの選手の表情には、「やり切った」という思いと「もっと試合がしたかった」という思いが複雑に入り交じっていました。特に、3年生はこれが最後の試合だったので、込み上げる思いも一入だったことでしょう。ただ、嬉しいことに3年生の大半は、大学に進学してバレーボールを続けるとのこと。高校時代に成し得なかった夢を、このあとの人生で叶えられるよう心から願っています。もちろん、1・2年はこれからが本番であることは言うまでもありません。そういう私も、涙をかみしめる選手たちを眺めながら、「選手が頑張っているのだから私も負けてはいられない」と、いつの間にか自分に言い聞かせていました。